
いいわけ

松本かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いいわけ

【Nコード】

N1571K

【作者名】

松本かなた

【あらすじ】

父がいなくなったことで歪み始めた生活に飽き飽きしていた頃、その歪みはどんどん増して行った。最悪の結果を迎えていったいどのような変化があるのだろうか。それともそんなことも感じられないほど彼女達は平坦な感情を、思考を育ててしまったのだろうか。

よく分からないあらすじとか言わないでください…すいません。テーマが分からないとか言わないでください…頑張ります。

つまらない。

暇だ。

…たい

そう切に願うのは私の家庭の事情が原因である。

核家族ではなく大家族とされてきた私の家は、父がいなくなつてから全てが崩れた。家族間の喧嘩が原因で均衡が崩れてしまったのだ。

父がいなくなり、祖父母は寿命が病か分からないまま他界し、その後母は頑張つて私を育ててくれているが殆どが裏目に出てしまつていて大変迷惑である。

何度か信用のおける友人に相談したりするのだが、期待するだけ無駄だと知つた。

年を重ねることにそういった悩みを聞くことも多くなつた。しかしすべてが馬鹿馬鹿しく感じて仕方がない。

その場その場でしんみりと話を聞いていれば、本人は文句を言つたりしないし、少し詳しくアドバイスをすれば喜ぶ。

上辺だけでもどうして人はこんなに喜怒哀楽があるのだろう。自分の事も他人の事ももう客観的にしか見れなくなつてしまった。

どうあがいても、どうもがいても出ることのできない檻に私はいる。ボーダーラインを色濃く引いて踏み込ませない。できれば踏み込みもしない。すべてが…そう。孤独と呼ばれる混沌とした世界。

「なあ、ここつてどう…こいつ。」

頭に何かがぶつかる感触がした。鈍い意識の中で私はゆっくりと目を開ける。ちなみに今は数学の授業中。

「寝てんな。」

一つ前の席の人物は…まあ真面目な人間だ。ただ少し空気というものを感じ取れないらしく、静かな教室で静かに寝ていた私は叩き起こされた。

眠気まなこのまま私は前の人物を見上げる。

「何？」

「ここ」

短な会話をし、ノートを見せられる。それほど難しい問題ではなかったが、馬鹿にするのも面倒なため仕方なく教えた。そしてそのまま眠りにつく。

基本的には授業中は寝るものと狂信する私は体育の授業以外、机に伏せている。怒られようが当てられようが知ったことじゃない。欲望のままに生きるのが人間だ。

どういうわけかこの学校は成績に関心意欲の項目がない。要するにテストで点が取ればいい。今時こんな学校があつていいのか分らないが、提出物で成績がマイナスになっていた生徒にとっては天国だ。

ただし、勉強が、凄く、難しい。でも入試は楽々だ。

「終わったぞー」

さきほどと同じ声の主が私を呼ぶ。その言葉で私は頭を上げた。目をこすり、目の前の人間が大きくため息をついたのを聞く。…不愉快だ。

「どこでどう頭を回せば授業聞かないでテストが出来るんだ？お前実はバカなんだろ。」

「授業受けてテストできないよりはましでしょ。悔しかったら学年一位くらい取ってよね。」

できもしないと分かり切った事をさらっと言われ、相手も折れる。

「俺だつてそんなに悪くはない…はずなんだがなあ。」

ふてくされたようにぼやく。まあ、真ん中くらいなら悪くはないだろうがいいとも言えない。…何ともコメントし辛い位地だ。確か三百五人中で百三十七位だったと思う。

面白みも何も無いとはまさにこのことではないだろうか。

帰宅した後、私は意味も無く自分の机を漁った。何かを探していたわけではなく、何かに期待しているわけでもない。ただ、衝動的に漁った。

どうせこの時間では親が帰ってくることも兄妹が帰ってくることも無い。

ああ、そう。さっき話していた前の席の男子が私の兄にあたる。学年が一緒なのは、単に双子だからというだけで決して兄が留年したからという訳ではない。

「ただいま。」

家に響いた声は母のものだった。私は部屋から出てリビングに向かう。

買い物袋を持って帰ってきたわけではなく、何か夕食を作ろうとするような気配も無い。近くにある椅子に座ってただだるそうにしていた。

「お母さん疲れたから夜は適当に食べておいて。」

「分かった。明日は私も部活あるから先に食べてていいよ。」

母は立ち上がり、自室に向かう。その後姿は仕事で疲れているというよりも、もっと幅の広い何かでグツタリとしている様に見えた。干渉するのも干渉されるのも我が家の女衆は好まないため、特に声もかけず私は冷蔵庫の中を覗く。

冷めた家庭と言われても仕方ないだろう。言い返そうとも思わない。今ならサイゴンの二百十一小節以降を悲しみいっぱいに吹けると思う。

「ただいまー。」

先ほどのものとはトーンも質も違う言葉だった。

「あれ。今日の飯って琴音だっけ？」

「うん。今さっきそうなった。まだ作ってないけど、」

無造作にかばんを置き、冷蔵庫を覗く。まだ私が食材を何も取っていないのを確認し、いくつかの食材を私の目の前に置いた。

「酢豚でよろしく。」

親指を立て、準備をしていく。どうやら手伝ってくれるらしい。少し嬉しさの混ざったため息を吐き、私はお礼を言った。

兄は勉強は出来ないが、料理は上手い。私を作るよりか断然おいしいと思う。

「二人とも。」

後ろからした母の声に私達は振り向いた。

「ちよつとコンビ二行ってくるけど、必要なものとかある？」

「私は…」

「俺も。」

「じゃっ」と言い、母はまた出て行った。

ずっと昔、家族4人で隣の県へ旅行に行ったことがあった。

二泊三日で、一日目はそれほど遊んでいなかったが、二回目には遊園地に行ったり、その中にある水族館ではしゃいだりした。

そのときはまだ兄も私も幼くて、両親に怒られてもお構いなしに騒ぎ立てていた。

誰もが当たり前に行うことを我が家も楽しんでた。…母も今のうちに疲れきつてはいなかった。

二人で囲む食卓は、多分淋しそうに見えるだろうが、学校であった出来事や、部活でのことをお互いはなしていると、淡々とした流れの中でも楽しく感じたりする。テレビはつけない。

「そういえば、あんまり活動しなくなったよな。琴音の部活。」
吹奏楽部にいる私は、秋の文化祭が終わってしまつて、もう殆ど活動はしていない。兄も中学の時は同じ部だったから、詳しい話をしても分かってくることが多い。

「文化祭終わっちゃったからね。うちの学校は定期演奏会無いし、今は特に何もしてない。」

「確か今はエルカミと大きな古時計やってんだろ？」

分かっていただけるかは不明だが、「エルカミノリアル」と何とかって人が編曲した超有名曲の吹奏楽バージョンのことである。

「今度トロンボーンの楽譜ばくって来てくれよ。見てみたい。」

私のやっている楽器はホルン。Fホルンを吹いている。兄はトロンボーンを吹いていた。

「そっちはどうなの？相変わらず暇？」

「まあな。大会とかあっても練習すんの面倒だし。」

兄の入っている剣道部はあまり盛んでは無く昇段試験の時くらいしか練習が始まらない。今がそのときなのだが、兄は今回受けられないので、行っただべって帰ってきたらしい。確か…今は二段だといっていた。

食事が終わって食器を流しに持っていく。手伝ってもらったお礼に洗い物は一挙に引き受けた。

兄は荷物を自室に置き、またリビングに戻ってくると、音楽をかけ、復習を始める。

勤勉なのはいいと思うけれど、どうせ分からないなら深く考えない方が利口だと考える。どうせ聞かれるのは私なのだから。

水の流れる音と本のページのめくる音が交差する。お互いに会話の無いまま時間は流れていった。

水を止め、兄の前に座る。理科の問題集を解いているようだ。

「あれ？それ苦手だったっけ？」

「お前が来るまで苦手なやつは封印してたんだよ。」

何冊かの問題集をテーブルの上に広げる。…若干中学生のものも混ざっている気がしたが、きつと気のせいだろう。

今やっている問題集を覗くと、無惨な答えが連なっていた。ため息を吐き、私は身を少し乗り出す。

そのときだった。家の電話の呼び出し音が淋しく響く。それに反

応じた兄は少しだるそうに受話器を取った。

「はい、もしもし。」

私はその間に兄が書いた答えをさらおうと思い、問題集を手にとった。

苦手な方ではない教科だったので当たっている問題も勿論あるが、これを誰の手も借りず、自分の力だけで解ける日が来るのだろうか……進級できることを祈る。

「はい……はい。分かりました。」

受話器を置いた兄が戻ってくる、眼差しはしつかりしているが、顔色がすこぶる悪い。いったい何の話をしたのだろう。

「母さんが跳ねられたらしい。」

一瞬だけ時が止まる。すぐさま正氣に戻ると、私は病院の場所を訊ね、二人でそこへ向かった。

そのときは大部混乱していて、何で跳ねられたとか、容態はどうとか、詳しいことを問う余裕は私には無かった。

病院は近くにあったため、残念なことに落ち着けるほどの時間は無かった。でも病院の前まで来たたん、何だか急に冷めた気がした。

生きているのか、死んでいるのかも分からないし、生きていることを願えるほど私は命の重みを知らない。自分の事ですら軽んじてるのに、他人を重んじることなんてそうそうできない。

だから私は無心で母の元へ向かう。

受け付けを済ませたのは兄で、先を歩くのも兄。

もう誰も居ないようなこの時間にここへ来るのは少々怖い気もするが、知った顔が眠るであろうところへたどり着いた。

「ご家族の方ですか？」

直ぐ近くにいた看護師が尋ねる。私達は特に返答することなく、ベットに横たわった母へ近寄った。心拍計が動いている。……生きていた。

私はゆっくりと看護師の方に目をやる。それに気付いたらしく、

淡々と話し出した。

「非常に危険な状況です。いつ容態が悪化してもおかしくありません。」

特に表情を変えることも無く告げた。

その後、明日の学校を察して帰宅するように言われたけれど、私はギリギリまでそこにいた。

帰り際に母の実家の番号を教え、難しいことはそちらに頼むことになった。

「とりあえずよかたな。」

あまり安心したようには見えなかった。でも、そう言うしかなかったのだろう。

不安なまま時間は流れ、よく眠れもしないまま朝が来る。私の睡眠時間が短いのは良くあることだが、片割れはどうだか分からない。今日くらいは学校を休むべきなのだろうが、それを願う人たちはいくらもない。しかし、多少の家事はあるため、私は午後からの登校となった。

午前中、頭の中に浮かぶのはどうでもいいことばかりで、自分がバカバカしくなった。

母の心配は勿論のこと、あの兄はしっかりと授業を受けているだろうか。だとか、仲の良い友達は今ある小テストで点数を取れているだろうか。だとか、どうでもいいであろうことを主に考えていた。

それと同時に今はいない父のことが少し恋しくなる。

楽しかったと思えてしまう日々ばかりが、何かを通じて私の中へ入り込んできた。

そのことに気付く度、私は自分が嫌いになる。

大分昔のことは忘れられるようになってきたが、それでも理想には遠すぎて、気付いたら果ての見えない時間が過ぎる。

見ることも感じることもできない。あるはずの終わりが分からない。

見えて欲しいのに天井が遠く、近い。

ブルブルブル

ケータイのバイブ音が私を現実に戻す。取り払うには少し重たい感傷をささやかに残し、画面を見た。どうやら母の妹さん基、私の叔母からのメールのようだった。

” 時間空いたら電話して ”

そこにはそう書かれていた。時刻は午前十時。特に何をしているというわけでもないのに、電話をかけてみることにする。どうせ、母のことだと思う。… そんな事言ってはいけないかもしれないが。

「もしもし。」

「もしもし。あ、琴音ちゃん？今大丈夫？」

平気だから電話しているのだが、一種の社交辞令のようなものでとりあえず”はい”とだけ答えた。いったいどんな話だろう。母が意識を戻したとか、子供と話したがってるとか、そういったものだけいいのだけれど。

しかし私は心の隅で確率の低さを確信していた。

「できれば今日は部活とかしないで直に病院に来て欲しいんだ。急げって言ってるわけじゃないから、マイペースに来てくれて構わないけどね。」

いかにも的外れな内容だった。とりあえず返事だけして電話を切ったが、何だか他に聞くべきことがあった気がしてもう待ち受け画面になっているケータイを閉じることができなかった。

ただ呆然と画面を見詰める。言うまでも無いが、勿論思考は止まっている。

少し時間が過ぎて、ふと我に返る。洗濯物を干さなければいけないことを思い出して、私は作業に取り掛かった。これが終われば学校へ行ける。勿論勉強するためではなく睡眠をとるためだ。

「めずらしいな。お前が起きてるなんて。」

「私だっただまには起きてるよ。さすがに先生からの扱いが悪く

なる。」

あれから学校に来て、特に一睡もしないまま下校を迎えた。学校に来てネガティブな思考が私を解放してくれなかったのだ。おかげで今日は授業中の発言機会が過去最多だった。

それがどうしたと言われてしまえばそこで終わりなのだが、クラスメイトの驚きような見たら報告せざるをえなかった。

「じゃ、行くか。」

ゆっくりと立ち上がり、私達は病院へ向かった。道中奏でる不響和音が昨晚と今昼の違いを物語った。不響和音では少し綺麗すぎたかもしれない。よくいうざわめきというやつだ。

有名ではないが、決して無名ではない病院に着く。ここも昨日来たときよりも賑やかだった。病院だけだ。

「こんにちは。」

振り返ると、先ほどの電話で話した叔母が手を振る。私達は立ち止まり、三人で足並みを揃えて母の病室へと向かった。

昨日は昨日で足取りが重かったのだが、今日は長く感じた。実際に部屋は遠いのだが、そういうわけではない。時間のながれがゆっくりでしかたない。早く帰りたいかった。

「母の容態はどうですか？」

「良くないみたい。一度横にある機械が鳴り騒いで大騒ぎだった。…今夜辺り危ないかもって。」

語尾が少し小さくなりつつもそう言った。二人してつばをのむ。病室のある階までやってくると、少し騒がしかった。そこはどうしても悪いことしか連想させてくれない。騒ぎの元凶の部屋が母のところでないことだけを祈りつつ、私達は一歩足を踏み出した。

「上村さんのご家族ですか？」

背後からの問いかけに振り向くと、そこには昨日いた看護師の人がいた。

「お母様は先ほど緊急治療室に移りましたので、こちらへどうぞ。」

さらつと重要なことを言い、私たちに背を向ける。三人で目を合わせ、目の前の人物にどういふことを尋ねる。

聞くには容態が急変したそうで、凄く危険な状況だそうだ。もともといつ悪化してもおかしくなかったため、対処に当たる人たちは落ち着いたものだった。

色々と言っていたが、医療に関しては全く知識の無い私たちにとつては意味が全然分からなかった。ただ分かったことは、母の持病とか疲れとかが重なっていた上にこの事故が起こってしまったがために、今、生と死の狭間をさまようことになっているということだ。「こちらでお待ちください。」

「先輩!!」

振り返った先にいたのは部活の後輩たちだった。手には可愛らしい紙袋を持ち、その中には品良く何かが入れてあった。

「卒業おめでとうございます。」

何が嬉しいのか、はたまた何が悲しいのかは分からないが、涙を浮かべてそういつてくる後輩もいれば、生意気そうに笑みを浮かべる子もいる。

特に熱心に教えらわけではなかったけれど、こうして形だけでも祝福してもらるのは嬉しい事だし、幸せだと思う。

「ありがとう。」

多分あつちの門辺りで黄色い歓声を浴びているグループの中に兄がいると思うので、私はメールを残し、先に帰ることにする。

あの後、母を見たのは白く冷たい肌になった後だった。今は親類の人たちに仕送りをしてもらって生活をしている。

高校を変えるわけにも行かなかったので、約一年半以上はそのようにして生活を続けた。色々と気にかけてもらったりしてくれていたので、特にこれといって苦は無かった。

ただ、今後の進路は流石に選ばなくてはいけなくて、兄は進学せずに就職となった。一風変わってはいるが、専門学校よりは色々苦

労が多かつたらしい。

私は就職する気は全く無かつたため、進学をした。勿論学費は何とかなるように手配した。珍しく机に向かって勉強し、ちゃっかり特待生を取ってしまった。

サークルには入らず、近くにアパートを借りてバイト生活を送っている。学部は少々マニアックなため、聞かないで欲しい。

以前までは兄妹揃って住んでいたが、今では各々違うところに住んでいる。

高校に通っていた時も一人暮らしとなんら変わらない生活を送っていたから、お互い特に支障は無いと思う。

家族がまた一人減って生活の色々なところが乱れた。母がいることによって重みになっていたことは、それとは別の何かに変わってまた私にのしかかる。

ただ、それで吹っ切れたこともいくつかあって、中途半端に築いてきた家族のもろさと、個人の生活の利点が十分に分かった。

悲しいことだが、一人暮らしが性に合っていたのか、今が一番楽だし、楽しい。

当たり前だという人も多いかもしれない。だが、こんな経験をしてしまった所為で、命のもろさを知ってしまった。重さよりもそちらの方が先に出てしまって、私の頭の中にはとても悲しい公式が成り立ってしまったている。

最後に孤独になってしまった私も、年を取ればいろいろなことが起こってくる。

それを軽く流すことの出来るように、これから先、生きていききたい。

一人、また一人と消えていく中、ここで連鎖が止まればまた新しい命も生まれてこれると思うから。

（後書き）

お粗末さまでした。

これは去年の夏から秋にかけて作った作品…だったと思います。
なんだか微妙なオチになってしまってすいません^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1571k/>

いいわけ

2010年10月22日00時50分発行